

第 33 回庭野平和賞贈呈理由

第 33 回庭野平和賞は、スリランカの「和解と平和構築センター（Centre for Peace Building and Reconciliation: CPBR）」に贈呈される。

今日の私たちの世界には新旧のさまざまな紛争が存在し、それらは宗教の悪用、地域社会の間に生じた緊張、度重なる自然災害や人災によって激化している。こうした問題を前に、多様な宗教による宗派間・宗教間の対話協力の必要性がこれまで以上に強く求められている。

庭野平和賞は宗教協力を顕著な貢献をした個人や団体を表彰し、世界各地に同様な取り組みを啓発することを目的に創設された。受賞者たちの活動はしばしば自己犠牲に支えられてきた。庭野平和賞は、暴力と不信のただなかに平和を育て希望を喚起するため、理解や評価を求めることなく、ひたすらに勇敢な取り組みを続けた人々の努力を表彰するものである。

庭野平和賞の贈呈は、今年で 33 回目を迎える。過去 5 年間、3 人の女性と 2 人の男性が受賞者となった。それは平和構築と平和調停の分野において、女性の役割に対する認識の高まりを反映している。そして今回、団体への贈呈は 10 年ぶりである。

受賞者を選考する「庭野平和賞委員会」の 11 人のメンバーに課せられた仕事は、疑いなく困難なものである。例年のごとく、今年もさまざまなジャンルから、受賞に相応しい数多くの個人や団体が候補者に名を連ねた。委員会による受賞者の選考は、平和への信条、霊性と信仰、宗教協力への取り組み、平和活動の質的・量的貢献度といった庭野平和賞の選考基準に注意深く照らしながら進められた。

その結果、「庭野平和賞委員会」のメンバーの総意により、今回第 33 回庭野平和賞がスリランカの CPBR に贈呈されることが決定した。

スリランカは人口 2200 万人の比較的小さな国でありながら、複数の宗教、民族、言語を抱え、その社会は多様性に満ちている。内戦は 2009 年の終結に至るまで数十年にわたって継続。その間に発生した 2004 年のインド洋大津波では状況が更に悪化した。スリランカ社会を形成する主要なコミュニティであるシンハラ人、タミル人、イスラーム教徒、キリスト教徒の間の持続的な相互和解の推進に向け、スリランカ政府はいくつかの施策を試みたがその成果は得られなかった。

内戦の終結は持続的な平和に向けて新たな希望をもたらしたものの、歴史に起因する不満、慣例化した不正や汚職、数十年にわたる戦闘ならびに行方不明者や国内避難民の発生が遺した心理的トラウマなど、その実現には依然として大きな課題が残されている。近年、とりわけイスラーム教徒の社会を標的とした新旧の暴力や差別により、平和実現への取り組みは困難な状況にある。

CPBR は 2002 年、ディシャーニ・ジャヤウィーラ（47）と、彼女の人生のパートナーであるジャヤンタ・セネヴィラトネ（65）によって創設された。

ディシャーニ・ジャヤウィーラは、弁護士としてコロンボで精力的に仕事をしていましたが、内心の強い使命感に従って弁護士をやめ、現在は平和で公平な社会の実現を目指し、スリランカ全土の人々と緊密な連携をとりながら CPBR の活動を続けている。活動を共にするのは、シンハラ人仏教徒であり紛争解決の専門家として名高い大学教授ジャヤンタ・セネヴィラトネである。

和解を進めるためには、少数の人間がリーダーとなって社会運動を支えていくだけではなく、さまざまな背景の人々が一堂に会し、互いに手本を示し励まし合いながら進めていくほうが効果的だ、というのがディシャーニの持論である。

CPBR を構成するスタッフの多様な顔ぶれや幅広いコミュニティーが、彼らの活動の多様性を象徴している。一丸となった彼らの努力はスリランカ社会にインパクトを与え、広く世界に対しては平和構築に向けたインスピレーションを提供している。第 33 回庭野平和賞が平和構築和解センターの全関係者に贈られる理由はそこにある。

CPBR は平和構築・平和調停・非暴力による紛争解決を推進する非営利組織である。それは草の根、地域、全国レベルの活動を行なうことで、異なった民族、宗教、言語、地域社会間の関係やそれぞれの地域社会内の関係において、個人や社会の精神的変容をサポートする。CPBR は、スリランカ全体の和解実現に向け、宗教指導者、女性、若者といった、社会への影響力が大きく、かつ変容が期待できる人々に焦点を当てている。

CPBR は紛争の根本原因に取り組むことを目的に設立された。そのため、最初に異なる社会に属する人々の間に信頼と友情を醸成することで、長年の内戦によって破壊された社会の絆の回復を目指している。実りある対話によって「他者」への理解が生まれたとき、初めて広範囲な社会的・政治的な変容に向け、相互の協働による持続可能な真の意味での紛争解決が実現する。

さらに CPBR は、津波被害を受けた地域の復興のため、多様な宗教・民族的背景を持つ人々を対象に、相互協力による問題解決の方法や生計を支える諸技能の習得に向けたトレーニングを行なった。

CPBR が目指すのは、権力分配・集中排除・異種共存を基盤とする民主国家、統一スリランカの実現である。そこでは、すべての国民が尊厳を持って平和で仲良く生活することができ、個々の民族・宗教のアイデンティティに対し平等な敬意と賞賛が向けられる。CPBR の目標達成へのプロセス、さらには組織のメンバーによる意思決定のあり方も、この大きな目標を反映している。CPBR の活動の基礎にあるのは、参画への強い信念と“現地社会オーナーシップ”原則によって増強された、頭—心—手を連結するアプローチである。CPBR は、現地の住民には自分たちの地域の紛争に対し独自の解決方法を見出す力があると信じている。センターの任務は、その手助けをすることにある。

CPBR は、その活動の方法論と指針を通して、スリランカ全土のさまざまな人々や地域社会の信頼を得ることに成功した。その信頼は平和活動の参加者に対し大衆の厳しい批判の眼が向けられ、政府による監視が行なわれていた時期においても揺るぐことはなかった。地域社会の間の相互不信と断絶が深まり、平和活動の余地が狭まり、活動の参加者への危険が高まっている時期においても、人々の信頼に加え CPBR が理想に向けて真剣な取り組みを続けたことで、彼らと地域社会の協働は確固たるものとなったのである。

以下は現在 CPBR が進めている構想である。

1) 宗教間対話構想：多様性、尊厳、民主主義。

暴力と苦難のただなかに置かれた人間にとって、宗教は心を癒す力であり慰めを得る大切な源泉である反面、憎悪・不信・残虐性を煽る道具として利用されることもある。そうした現実を理解し、スリランカの社会形成に多大な影響力を持つ国内のあらゆる宗教の指導者の役割を認識した上で、当構想を通し CPBR は異なるコミュニティ間の和解と平和を生み出すため、それぞれの宗教伝統からインスピレーションと精神的資産を引き出すべく宗教指導者と協働する。当構想に関わるあらゆる聖職者は、男女を問わず平和に向け宗派内ならびに宗教間の対話・協働に従事する。その取り組みは、率直、真剣、かつ変容をもたらす方法でなされる。

2) 「映像の声（ヴォイス・オブ・イメージ）」構想：自分の姿を表現しよう。

新鮮さ、独創性、熱意、斬新さは若者の最大の特性である。世界や人生に対する若者の見方は異なる。彼らには、新しい視点で世界を眺め、スリランカの新たな未来像を思い描くことが可能なのだ。「映像の声」構想は、往々にして誰にも聴

いてもらうことのないスリランカの若者たちの話や夢に、表現の機会を与えることを意図している。

3) 女性構想：心、大地、魂。

女性構想は、スリランカの大地に平和と新たな生活を築くため、自分たち自身や内に秘めた力を探求し発見したいと望んでいる女性たちに向けた、力強く創造的なアプローチである。当構想は、多様な背景の女性たちがスリランカの内戦で体験した喪失や苦難を共有することでお互いの間に絆づくりをすること、平和構築のためのトレーニング、そして環境にやさしい菜園作りなどの技能トレーニングを通し、女性たちが持続可能な生計手段を身に着けること、を組み合わせた内容になっている。

上記のうち、とりわけ最後の構想が物語っているように、平和と和解に向け高邁かつ果敢なアプローチと活動を展開する CPBR の取り組みは、同時に「国連気候変動パリ会議 (COP21)」や「持続可能な開発目標 (SDGs)」で示されたビジョンや目標を反映している。

CPBR の先例に倣い、世界中のさまざまな地域で、今後も志を共にする更に多くの団体や個人が輩出されることを強く願う。

庭野平和賞委員会 委員長 ビルギッタ・ランタカリ